

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0770700581		
法人名	特定非営利活動法人豊心会		
事業所名	グループホームすずらん日向 I		
所在地	福島県須賀川市日向町17番地		
自己評価作成日	平成29年1月31日	評価結果市町村受理日	平成29年6月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/07/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人福島県シルバーサービス振興会		
所在地	〒960-8253 福島県福島市泉字堀ノ内15番地の3		
訪問調査日	平成29年3月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

それぞれの生活リズムを大切に、入居者さんから出た要望や希望については、すぐに対応できるように心がけている。また、本人の言葉を第一にケアを考えていくようにし、本人に良いものを選択していただきながら生活を送って頂けるように、申し送りや職員会議などで話し合っています。地域との交流にも力を入れ、10年続いている小学校との交流会や、西川区の皆さんのご協力のもとで行われている地域交流会も今年で3回目となり、地域包括支援センターの職員さんなどご協力いただける関係が広がってきている。また、外出の支援では遠いから行けないではなく、ご家族様のご協力もいただきながら、松島への旅行や仙台での結婚式への参加、高校野球県大会決勝戦観戦なども出来るように支援しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1. 職員は利用者一人ひとりに寄り添い利用者の思いを把握し、思いに沿った支援を行っている。隣の思い出の地を訪問したり、孫の結婚式へ参加したり、野球が好きな車椅子の利用者が球場で野球を観戦できるよう様々な調整をして実現させている。
2. 夏場には屋外のかまどでご飯を炊き、薪割りから炊飯まで利用者に教えてもらいながら一緒に行う等、家庭的雰囲気の中でゆったり穏やかに利用者一人ひとりが能力に応じた役割を持って生活できるよう支援している。
3. 職員の階層別研修体制が法人の協力で整備されている。また、資格取得に向けた支援体制もあり、職員の資質向上につながっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念の他に年度ごとにユニットの目標を立てている。また、業務日誌に載せる事で実践に繋がるようにしており、その日の終わりに振り返りも行い連動性を持たせている	地域密着型サービスの意義を踏まえた法人理念と事業所理念を実践するため毎年、テーマと目標を掲げ、事務所に掲示している。申送り時等に振り返り確認しながら職員間で理念を共有し、実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣小学校との交流や地域の方々が芋煮会などを事業所内にて開催して下さっている。また近隣の施設ともつながりが生まれている。地域のお店を利用し顔の見える関係作りに努めている	毎年、近隣の高齢者も大勢参加する地域交流会に利用者と参加し、地域の人と顔見知りになれる機会がある。地域の様々な行事に利用者と参加したり、毎月、赤十字ボランティアの訪問もあり、双方向の交流が行われている。また、認知症サポーター養成講座を数多く開催し、地域貢献にも努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	10年続いている小学生との交流事業では、認知症サポーター養成講座を受講してもらい、認知症について学んでから実際に触れ合ってもらっている。またその際に車椅子の使用方法を職員が教える機会を持っている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、事業所の取組内容や具体的な改善課題がある場合にはその課題について話し合い、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービス向上に活かしている	入居者さんの生活の様子をスライドを使い説明している。法人独自のサービス満足度アンケート調査の結果などについても率直なご意見を頂けるようにしている。苦情などについても、家族会代表者の方にや地域の方にご意見をうかがっている	運営推進会議は、定期的開催されている。事業所からスライドを使って状況報告(事業所行事、職員研修、家族からの苦情、満足度アンケート結果、避難訓練等)をし、委員からの意見で苦情を出した家族の不安に気づき、今後のサービス向上に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所からの紹介などでいらした相談者に対してグループホームの説明や見学などを行っている。認知症カフェなどで話す機会はあるが、頻度としては多くは持っていない。	市が開催する地域包括ケアシステム推進委員会の委員として参加し、介護・福祉分野からの意見を出したり、市の助成金で認知症カフェを開催しており、定期的な報告の機会がある。また、日頃から市の担当者とは情報交換している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の手引き(2001)を使った外部研修へ参加し、学びの機会を持っている。また、日常においても職員間でも身体拘束にあたらぬかなどは、言葉にすることで意識を高められるように努めている。	毎年、法人内レベルアップ研修を計画的に行い身体拘束廃止に向け取り組んでいる。また、身体拘束をしないケアの実践に向けて、職員会議の時に具体的内容を確認しながら支援している。日中、玄関の施錠は行っていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「不適切なケアと虐待を考える」という外部研修に参加し、学ぶ機会を持っている。また、ミーティング時には、虐待のニュースがあった時などは話題に出し話し合いそれぞれが意識してケアにあたるように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	資格取得に向けての勉強会などで学ぶ幾何を持っているが、実際に現場の中で制度についてなどを話す機会は少ない。今後制度関係についての勉強会なども開催していきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、グループホームの見学や説明、サービス内容や料金についても再度説明させていただいている。また不安ごとや希望などがないか書面も使いながら、本人やご家族の不安を出来るだけ解消するように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1回は入居者さんのご家族で作られている家族会の集まりを開催し、会長、理事長、副理事長、管理者も出席し、改善事項を考え、ご家族からもご意見をいただける機会を持っている。また、利用者サービス満足度アンケート調査を毎年度行っており、あげられたものについては改善するように努めている。	定期的を開催する家族会や家族面会時等に家族の意見を聴き取っている。また、年1回家族からアンケートを取り集計結果を検討し、運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎年理事長、副理事長が職員との個人面談を行い、職員から要望や提案が出来る機会を設けている。また、現場ににおいての提案等については、その都度管理者と話し合い反映できるように努めている。	日常的に管理者は職員の意見を聴き取っている。また、日頃から職員間のコミュニケーションはよくとられており、どのような意見等も言いやすい雰囲気である。さらに、理事長、副理事長が職員の個人面接を実施し、職員の意見を把握し、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	理事長、副理事長との面談にて、職員個人のこれからのことについてや金銭面、職場環境の改善などについても、話が出来るようにしている。具体的には、職場環境の整備や退勤時間の改善などがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	経験年数や考えなどに合わせて外部研修の参加を促している。また、法人内研修においては、経験年数を考慮して参加時期を決定し、悩みなどを話し合えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	西川区と協力して行っている芋煮会に、近隣のグループホームにも参加していただき、打ち合わせなどで職員同士が話す機会などを設けている。また、研修受け入れを積極的に行い、お互いに取り組みなどの情報交換を行うようにしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に生活史をお渡しし、その中に不安や要望などを記入できる欄を設けている。また、説明や見学でいらした際には、その都度要望や不安などを聞くようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談や施設見学の段階から、ご家族が抱えている悩みや不安については、お伺いするようにしている。また、サービス利用前でも相談などがある場合には、寄っていただけるように声をかけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時には、グループホームへの入居のみに捉われず、必要であれば他のサービスについても説明を行い、本人とご家族にとって必要なサービスに繋がられるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	外出の計画では、職員だけで決めるのではなく入居者さんも会議に参加していただき、目的地など計画を立てるようにしている。また、裁縫などは職員が教わるような形で関わりを持っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	自宅での生活について教えて頂き、現在の生活の躰きと一緒に考えていくようにしている。行事などの準備においても、ご家族様の協力のもと準備を進める事が出来ている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住んでいた場所での行事への参加や、行きつけのパーマ屋さんに行く事が出来るように支援している。また、いつでも面会に来られるようにしている。	利用者の思いを大切に、自宅や馴染みの場所やそこで開催される行事、利用者の思い出の場所へ出かけられるよう様々な企画をし、支援している。また、事業所へ友人や家族が訪れた際は、お茶を出し、ゆっくり過ごしてもらうよう配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	それぞれが得意とすることを生活の中に取り入れ、お互いが認め合えるような関係が築けるように努めている。また、言い合いになる場面でもただ止めるのではなく、お互いの主張が出来るように必要以上に介入しないように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院等でサービスが終了となっても、その後協力できることが無いかなど、面会を通して話をする機会を設けている。また、サービスが終了した方のご家族がボランティアに来てくださることもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者さんが話した言葉を大切にするように努めている。また、アセスメントシートにも、本人の言葉をそのまま載せられるようにしており、日ごろから意識して関われるようにしている。	日常ケアの中で利用者の話に耳を傾け、利用者の言葉で思いや意向を把握するよう努めている。また、家族からも利用者の思い(大切にしてきたこと)や生活歴等を聞き取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際にご家族様より生活歴を記入していただき、職員間で共有を図っている。また、入居されてからも写真などを見ながら昔の暮らしを知り、生活環境を整えていくようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人が持っている役割や趣味などを大切に、職員中心の生活にならないように努めているが、行事ごとや体調不良の方が出たりすると、ばたばたとし、職員中心になってしまいう事もある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の面会時にご家族から会った要望等については、業務日誌に載せ介護計画作成時に反映できるようにしている。また、アセスメントシートでは、本人、家族、職員の言葉を分けて記入するようにし、それぞれの視点を大切にしよう努めている。	利用者の現状把握を行い、利用者・家族の意向を踏まえて利用者の状態に即した介護計画を作成している。担当職員が介護計画の評価を実施し、定期的に介護計画の見直しをしている。利用者の状態に変更があった場合にはその都度、検討し介護計画の変更をしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録には日常の様子を記録し、特記事項に関しては業務日誌に残し共有するようにしている。また、状態が変化した際には、その都度介護計画の見直しを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人からの希望があった場合は、職員同士で連携をとり、その時に叶えらかなえられるように努めている。また、似たような要望でも一括りにせず、それぞれに合った支援になるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の小学生との関わりや、区の方との交流会、地域のお店への外出、馴染みの美容室への外出など、地域にある資源と出来るだけ関わりを持っていくように努めているが、外へ出かけるという支援は、継続性が持ていないため今後の課題となっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居してからも、かかりつけ医に継続して受診できるように支援している。また、受診の申し送りをご家族と密にし、次回の予定や薬の変更など、その都度連携をとり安心してかかりつけ医を受診できるようにしている。	利用者・家族の希望に沿った医療機関で受診している。通院は家族と事業所が協力して行い、受診結果は家族から報告を受けたり、通信「1ヶ月日記」で家族に報告する等、情報共有されている。また、協力医による冬期間の訪問診療と24時間オンコール体制がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内の看護師へ申し送り相談をし、その内容は申し送りや口頭で介護職員が把握できるようにしている。また、今後起きうる状況についても、相談しケアに反映するようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された際は、病院にグループホームでの生活状況について情報提供を行っている。また、面会時に状況確認等を行いながら、退院後の生活に向けて、病院から情報提供していただけるような関係作りに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の段階で終末期のケアについて説明を行い、意向の確認をしている。また、主治医、家族と話し合いを重ねながら、本人にとって良い状態で過ごせるように協力して支援できるように努めている。	契約時に事業所の「重度化・看取りに関する指針」を、本人・家族に説明し意向を確認しながら同意を得ている。また、利用者が重度化した場合には医師・家族・事業所・関係者が話し合い、情報を共有しながら家族等の意向に沿って看取り支援を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	いつでもマニュアルで確認できるようにしている。また、予測される急変等については、事前に話し合う機会を設け、いざという時に動けるように準備している。しかし、定期的に訓練する機会は出来ておらず、今後会議の中などでも検討していく必要がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協体制を築いている	避難訓練を行っているが、頻度としてはまだまだ少ない。 日々の中で、昼食は外で釜を使いご飯を炊く事を日課としており、電気やガスが遮断された場合にも備える意味合いも込めて行っている。	年1回消防署立ち会いで、夜間想定火災の避難訓練を実施している。また、地震・水害による避難訓練(各1回)も実施している。非常時用食料等も備蓄されている。課題であった地域との協体制は働きかけを継続している。	昼夜を問わず、全職員が火災・地震・風水害等の災害に対応できるよう避難訓練回数を数多く実施することが望まれる。また、早急に地域との協体制を築いて欲しい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	目上の方という事を忘れない様に、普段から言葉使いに気を付け、個人の性格やこだわりなどを大切に出来るように努めている。また、入浴やトイレ誘導の場面では、出来るだけ同性の職員が対応するように努めている。	倫理委員会や研修会を通して共通認識と理解を深め、利用者の尊厳と権利を意識したケアを徹底している。また、利用者への言葉づかいは誇りやプライバシーを損ねない対応を常に心がけている。書類関係は鍵付きの書庫管理が行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ選択してもらえるような声掛けを行うようにしているが、ばたばたしていると職員からの声掛けがいつも好んでる事などを予測しての会話となり選択肢がなくなってしまう事もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来るだけ入居者さんのペースに合わせた生活を送って頂けるように、それぞれの生活リズムを尊重している。しかし、入浴や外出などで時間に追われると、誘導するような声掛けになってしまう事がある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段からどんなものが好きでどんな色が好きなのかなどを意識しながらケアにあたる事で、本人の好みを把握するように努めている。また、デザインについても介護しやすい服ではなく、本人が着たい服を着て頂けるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事に関連した作業を利用者とともに職員が行い、一緒に食事を味わいながら利用者にとって食事が楽しいものになるような支援を行っている	広告を一緒に見てメニューを考えたり、一緒に調理をしたりすることで、好みや得意料理を知るように努め、食べるだけのものではなく、自宅で作っていたころの話などを聞かせて頂きながら、一つの役割にもなっていくようにしている。	家族からの情報や利用者との会話などから、嗜好を把握し、スーパーのチラシを参考に食事メニューを作成している。食材の買出しや下処理、片づけなど利用者の出来ることを手伝ってもらい、職員も一緒に食卓を囲みながら楽しい食事となるよう支援している。また、外食や誕生日、希望食等も実施している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個別に食事量と水分摂取量をチェックして、職員間で共有している。また、水分量については専用少子に記入している為、いつでもチェックできるようになっており、状態に合わせて支援できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	夕食後は、入れ歯洗浄剤を使用しているだけでなく、衛生を保てるように支援している。しかし、自立されている方に関しては、声掛けのみとなってしまっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別に排泄記録表を使い排泄リズムを把握するように努めている。排泄リズムを把握し声をかける事で、リハビリパンツから布パンツへ改善された方もいる。	排泄チェック表で利用者の排泄パターンを把握し、身振りや表情・動作等の排泄サインを見ながら、自尊心や羞恥心に配慮したトイレ誘導と声かけ(同性介助)を行い、自立に向けた排泄支援を行っている。その結果改善された利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄記録表を使用し、排便のリズムを把握し、飲み物の選択や腹部マッサージで、排泄を促すようにしている。また、便秘について自覚されている方とは、食べ物や飲み物について良いものを伝え、自身でも気にかけてもらえるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴時間にこだわりのある方には、時間に合わせて声かけを行い入浴できるようにしている。また、希望が無くても本人の生活リズムに合わせて声をかけるようにしている。しかし、毎日全員が入浴するということまでは至っていない。	利用者の希望に沿った入浴支援を行っており、夜間入浴や日に2回入浴される方もいる。入浴剤や季節の菖蒲湯、ゆず湯等でくつろいで入浴して頂くよう支援している。また、入浴は同性介助で配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温や就寝前の環境に配慮している。また、個人個人の生活リズムや習慣に合わせて就寝の声掛けを行っている。寝付けない時には、温かいものを勧めながら話をしながら過ごしていただくようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効果や副作用についていつでも確認できるように個別にファイリングしている。また、薬の確認を担当する職員を決め、変更等についても漏れがないように注意している。薬の変更時には、業務日誌に載せ状態観察についても職員全員が注意できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者さんの好きな事や楽しみを生活の中に取り入れられるように努めている。日常生活では、畑仕事や調理などを中心に、それぞれが活躍できる場面を意識的に作っている。しかし、希望や要望が少ない方へのアプローチがまだまだ足りないのが課題となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	本人の希望があれば、出来るだけ話があったタイミングで出かけられるように職員間で連携をとっている。また、温泉や地域の行事ごとへも計画を立てて出かけられるよう支援している。その際には、赤十字ボランティアの協力も得ている。	思い出の松島旅行(個別対応)や大好きな野球応援、孫の結婚式への出席など利用者の思いを大切にしたい外出支援を行っている。また、初詣、花見や紅葉見学などボランティアの協力を得ながら季節に応じた外出が出来るよう支援している。日常的には買い物や食事などに出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全員ではないが、個人でお金を所持している方もいる。また管理はグループホームでしているが、必要な時にはいつでも使えるようにし、買い物へも出かけられるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	必要な時にはいつでも電話を出来るようにはなっているが、実際にかけている方はいない。また手紙については、年賀状のやり取りのみになっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースでは、落ち着けるように電球の色は電球色を利用し、夜間不安になりやすい方の洗面所には白色電球を使う等使い分けている。また、音の重なりがないように配慮し出来るだけ雑音の少ない環境作りに努めている。	リビングには行事等の写真や手作りのカレンダー等を飾っている。場所や利用者に応じて電球を使い分けた照明にするなど、居心地よく過ごせるよう配慮されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファなどを準備し、気の合う人同士で過ごすことができるようになっている。しかし、和室やパーテーション裏の椅子などは、あまり利用される方がおらず、環境面を含め改善が必要となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切に本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている	ご家族にも協力していただきながら、居室には家で使っていた家具や仏壇を持ってきていただき、馴染みの物に囲まれた環境作りを行っている。また自身の趣味である裁縫道具などもいつでも使えるように、居室へ置いて頂いている。	大切にしている仏壇や家具・ギター・人形などを持ち込んでもらい、利用者が落ち着いて過ごせるよう家具の配置は家族と相談しながら、決めている。家族写真や縫いぐるみなどを飾り居心地よく過ごせる居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	アセスメントシートに出来る事と支援が必要な事を整理できるようにし、それぞれの残存機能を意識した関わり合いが持てるように努めているが、時間に追われると職員が先導してしまう事もある。		